

平成26年度 川崎市防災シンポジウム パネルディスカッション（詳録）

【映像で、阪神・淡路大震災を振り返る】

概要：シンポジウム冒頭で日野（川崎市防災企画専門員）から、阪神・淡路大震災再現映像や当時の映像などを紹介しながらの解説を行った。

【秦 詩子 様の基調講演についての、各パネリストの感想】

日野	それでは、今の映像や、秦様の基調講演についてのパネリストの方々も思うことがあったのではないのでしょうか。感想やご意見をひとつずつお願いいたします。
若林	秦さんのお話を聞いて、災害時の人とのつながりというものに関心を持ちました。日頃の活動の中での人と人とのつながりをどのような形でこれから構築していくかを考えることが重要と感じました。
脇本	私も日頃の繋がりがすごく大事ということを感じました。講演の後半にお話しいただきましたが、避難し炊き出しを行っていた人達の中に、実は同じマンションに暮らしてらっしゃる人が居たことがあとでわかったといったお話がありました。 日頃からのお付き合いが、災害時にも自分らしく、人として温かくいられるという事で、非常に心に刺さるお話を聞いて、有難い気持ちになりました。
中村	貴重なお話を伺わせていただきました。ちょっと視点を変えてお話させていただきますが、秦さんもそうだったかと思えますし、この前の御嶽山の噴火の時はそうでしたが、災害時のフラッシュバックの問題があります。御嶽山に救助に行った現職の消防職員ですらPTSDになっており、災害所でうずくまらないためには総合的な、精神的な援助が重要になってくるのではないかと感じました。
日野	秦さんから、今の3人の皆様の感想を聞いて、何かお感じになりますか。付け加えることなどもありましたらよろしくをお願いいたします。
秦	今、PTSDという話がありましたが、それは思いもよらないところで出てくるものなのですね。人間ってそんなに強くないな、乗り越えた時には強いなと思ったりもしますが、やっぱり弱いものだなと自覚しました。そこで人に支えてもらったことが本当に有難かった。震災を体験してから、私はとりわけ感謝することを大切にしています。
日野	PTSDのお話や、さらにそれを癒す、軽減させてくれるのが「つながり」だというお話ですが、本日は「災害時に地域で支えあうためには」ということでテーマを設定しておりまして、まさに適切なご意見だったかと思えます。

【各パネリストの「災害時の地域での支えあい」に関連した取り組みについて】

日野	それでは、ここでテーマを少し掘り下げて行きたいと思えます。実は、本日お集まりの各パネリストの皆様は、今後の参考となるような、様々な活動をされている方々です。そこで、皆様のご経験などを踏まえながら、今日は災害時の地域での支えあいに関して、取り組むべきことについて、ご紹介願います。
若林	地域での支えあいについては、私どもの日頃の活動において、「いかに多くの方々と顔見知りになるか」ということを主目標にしています。というのは災害時には自分自身が被災者となる可能性もあります。特に私は橋中学校避難所運営会議の委員長もしておりまして、委員長として出て行けないかも知れない。そうした時に、私が出られなくても、他の方が同じようなことが出来るように、人と人とのつながりを持ちながら、災害があった時にいち早く避難所が立ち上げられるような形を想定して動いています。

	<p>活動の中では色々とやらなければならない事が多くで大変なのですが、先ほど秦さんがおっしゃっていたように、つながりがないと意思の疎通が図れないことが問題になるのではないかと、思っていますので、こうした活動を続けています。</p>
日野	<p>若林さん、せっかくの機会ですので、若林さんが実際に取組まれている状況などについてもお話いただけないでしょうか。</p>
若林	<p>そうですね、私は高津区に住んでおりまして、新作第一町内会の会長をしております。そこは橋中学校の学校区にあり、そこで避難所運営会議の委員長をしています。私の町内会には市民プラザがあります。それから橋ごみ焼却場もあり、広域避難場所にもなっています。それから橋中学校は当然避難所ということで、色々な施設が集積しているんですね。これらを災害時にどう対応していくかという事を考えています。</p> <p>日頃の町会の活動の中で、災害時の食糧や水の問題について、備蓄にはかなり配慮しています。例えば、町会の備蓄倉庫には5000食保管しています。また、備蓄食糧は5年で賞味期限が切れるのですが、これを無駄にしないようローリングストックしていきまして、例えば敬老の日に記念品として防災の備蓄品を配布するなど、無駄にしないようにしています。</p> <p>例えばそんな配布の折に、地域の高齢者がどれくらいいるのか、またどんな方がいるのかについて、状況把握をしています。具体的には、敬老の日に記念品の配布をするというと、記名式で受け取りしますので、お名前を記入してもらえますのですが、そこでこの地域には何人くらい高齢者がいらっしゃるのか、どういう方が住んでいるのかというのが大体わかる。また、敬老の品に高齢者のお宅に記念品をお配りしに行くのですが、そこで高齢者の方々の状況を、地域の人が把握する、といった形で、つまり地域の間がいかんして災害弱者の状況を把握できるか？という事を目標にしています。</p>
日野	<p>有難うございます。非常に積極的な活動をしていること伺うことが出来ました。それでは脇本さんご活動状況などをお話願います。</p>
脇本	<p>男女共同参画センター「すくらむ21」では、地域の、災害時の支え合いを作っていくような取組をしています。特に、女性の視点を出発点に、色んな立場の方達の災害経験に基づいた減災をしていく、という事を目的に、市民と一緒にプロジェクトを立ち上げています。これは、2012年の9月から活動している「女性の視点で作るかわさき防災プロジェクト」というものです。</p> <p>プロジェクトの活動として、東日本大震災で避難している、女性とこどものための避難者サロンを、毎月1回行なっているのですが、そこで話された被災体験や被災地への支援者の報告書等から、例えば避難所から外の支援者へは一部の男性リーダーを経由して必要な支援を求めることが多いわけですが、そこには優先課題の認識や避難所の環境に対する感じ方の違い、必要とするものが男女で異なるなど十分に反映することが難しかったといった事例がある事がわかりました。</p> <p>そこで、「災害時に一人の人が色々な人の立場を想像するのは難しい」という事実を踏まえ、私達の日頃の防災活動の中で、とにかく担い手を増やしていく過程で、「災害時には、いろんな課題に直面しうる、という前提のもと、多様な立場の人が災害時にどう行動していけば良いのかを知ったり、一緒に考え学び合う機会をつくるのが大切ではないか」と考えています。</p> <p>このため、プロジェクトのメンバーと共に、川崎市内を中心に自分の暮らしに合わせて取組める防災を、出前講座なども実施しながら、町内会の人達と一緒に少しずつご相談して進めさせてもらったり、また、お手元の資料にもありますが、集合住宅に暮らす方も増えていますので、マンションに暮らす人がどう防災に取組んでいくかといったテーマで勉強会を実施するなどの取組なども行なっています。</p>
日野	<p>それでは中村さん、よろしくお願いたします。</p>
中村	<p>私は、総務省消防庁の外郭団体であります、消防科学総合センターというところで図上訓練指導員をしています。ここにお集まりの皆さんの多くは防災訓練という実技訓練というものは多く経</p>

	<p>験されていると思いますが、机上でも体験できる訓練として、図上訓練の指導というものの指導を行っています。</p> <p>さて、東日本大震災でも、阪神・淡路大震災でも、地震は生活基盤を一瞬で破壊されます。そうした時にご家庭だけでなく、企業も被害を受けますよね。企業は事前の対策として、BCP（業務継続計画）を策定して、地震災害に対応しようとしているのですが、それでもやはり会社を立ち上げることが出来なくなり、震災倒産をしてしまう企業が多いのも現実です。</p> <p>各個人の方ではライフコミュニティプランというものを作られている方もおられると思います。生活というものはやめる事は出来ないのです。一方で企業は倒産すればやめる事ができる訳ですが、ただ、それでは給与を生活の糧にしている方にとって企業の倒産によって生活に大きな支障がでてしまう。だから個人だけでなく、企業を含めて、地域で事前の災害対応力を高めておくことが必要です。</p> <p>そのために、DIGという図上訓練などを実施して、地域の強さや弱さ、特に弱さの部分を理解することで災害対応力を高める、そして災害を知るという事です、つまり災害時にどういう事が起きてしまうのか、といった事をその地域自身が理解するために、現在活動しています。</p>
日野	<p>秦さんは、今までのお話を聞いてどう思われましたか？ ご経験などを踏まえて、何かアドバイスとか、お感じになったことがあれば教えていただけますか？</p>
秦	<p>私は専門的なことはわかりませんが、市民の立場から申しますと、やはり地域の色々な活動に参加して、地域の一員として動くという事はとても大切だと思います。例えば趣味のサークルなど参加する事でも良いし、自治会の活動に参加する事でも良いと思いますし、子ども会やお祭りに参加する、そういう物の中に入って、自分の動けるものがあるかどうか探してみる、という事も、ひとつの防災につながるものだと思います。</p>
日野	<p>皆さんのお話から私も少し思うところがありまして、先ほど脇本さんからお話がありました「女性の視点」というものについて、最近では国の中央防災会議の議論などでも「女性の視点で見た避難所生活」といった事で取り上げられているのですが、例えば女性が避難所生活を快適に送る事ができれば、男性ももっと快適に暮らせるというような事です。</p> <p>阪神・淡路大震災では当時避難所生活を送った女性の方の、こんな手記が残っています。「避難所から会社に行く前に、私はトイレに行かなければいけない。でもトイレに行く度に、私は自分の人格が崩壊するような、そんな感じがする。」それほど凄まじい、トイレの汚れ具合がありました。</p> <p>これが東日本大震災の医療関係者が書いた報告書の中には「女性のトイレは比較的きれいだったが、男性のトイレは目を覆うばかりだった」といった風が変わって来ています。</p> <p>私は単純にトイレの話で女性の視点を語ったわけですが、こうした事例をひとつ取っても、「女性の視点」を入れていくことが困難な状況下にとっていかに大切か、災害を凌いで行くためのしなやかな力になっていくのではないかと、という感想を持った次第です。</p> <p>また、中村さんからBCPという言葉、事業継続計画という意味ですね。また、LCP、生活再建計画のお話も出ましたが、ここにもうひとつ、最近話題になっているのが、CCP、地域継続計画というのがあります。</p> <p>皆さんも地域に居て地域をどう維持継続させるかということに取り組んでいるかと思いますが、こうした維持継続に関して、しっかり計画を作って備えよう、というものです。先ほどの秦さんの基調講演にありましたが「普段から顔見知りになるような準備をしておけば、つながりをもっと作っておけば、もっと沢山の事がやれたかもしれない」とおっしゃられ、私は重く受け止めていますが、まさしく、地域を継続させる、なるべく早く復興する、そうした事は大変重要なわけですが、ベースに来るのはやはり「つながり」であろう、そんな感想を持ったところです。</p> <p>それから若林さんのお話からは、地域のリーダーがいかに頑張るかということ。これは阪神・淡</p>

	<p>路大震災でもそうだったのですが、例えば地域や避難所においてリーダーが生まれたか否かによって、実は復興や救援のスピードが大きく異なったという報告書があります。そういう意味で、有能なリーダーを生み出すことが出来る地域の環境というのをどういうものなのかについて、これまでの震災は問題提起をしている事になろうかと思えます。</p> <p>実は、これからの話はもう少し、この辺りに切り込んで行きたいと思えます。</p>
--	---

【多様な地域住民に支えあいの輪の中に入れていただくには？】	
<p>日野</p>	<p>災害時での地域での支えあいの中で、多様な地域住民（例えば、働き盛り世代、若者、女性・子育て世代、高齢者や障害をお持ちの方等々）が地域での支えあいや助けあいの輪に入るにはどうしたら良いか、またこうした地域での取組には何が重要か、について、ディスカッションをお願いいたします。</p>
<p>若林</p>	<p>私達の町内会にも色々な方が居まして、私達もお祭りや盆踊り大会など、色々なイベントを行う中で、人とのつながりを作っています。やはり、何かあった時のことを考えたとき、私達が最初に重要と考えているのは、色々な人達を引っ張っていく組織が組織を作らなければならないということです。</p> <p>それにはひとつの町内会だけが頑張っても駄目で、いくつかの町内会が集まって、またそこには橋中学校と3つの小学校、合わせて4つの学校で1つのネットワークを作って活動しているが、そこに集まる多くの人達が参加する中で、また、規模によってそれぞれ活動が違っている中で、いかに組織としてひとつになれるか、また準備していけるかが大事ではないかと思えます。</p> <p>そのあたりがまとまっていないと、沢山の人が集まったときに、右往左往してしまいます。</p>
<p>日野</p>	<p>脇本さんいかがでしょうか。</p>
<p>脇本</p>	<p>私が日頃「女性の視点で作る川崎防災プロジェクト」の方々と一緒に活動していて感じるのは、「生活に身近なことであれば関わりやすい」ということです。</p> <p>女性の視点から考えるというのは、直後対応を中心としたハードの部分ではなく中長期的なソフト部分を含めて、多様な生活経験のある女性が一緒にその防災・減災の取り組みの中心にいて、被災した人の健康と命を守るということについて豊かなイメージを持てるようにしておくことが必要だと感じます。</p> <p>トイレの問題一つとっても、「災害時にトイレが使えなくなった時にどんなに困ったか」というプロジェクトメンバーの実体験も含めて、平常時にどう備えたら良いかについて真剣に考え始めたことがきっかけとなり、「災害時に使えるトイレ対策編」という冊子を作成し、展示物を具体的につくり、備え方を目で見て感じていただけるような工夫をしました。その取組の過程で、水を使わないで流す方法や排水設備の点検など、市民ボランティアの方々と行政や専門家の方へヒアリングしたりしました。また、川崎市総合防災訓練の中でブースを出展した時にニュースレターにまとめて配布するなどして紹介したところ、今までいらっしゃらなかった人がブースに来て「わたしはこんな工夫をしています」とか、「子どもがいる家庭だったらこうした方が良い」などのご意見やアドバイスをいただきました。私たちのプロジェクト活動はこうした声をまたさらに発信していく、といった事を地道にやっています。</p> <p>一口に防災と言っても、同じ家族で、同じ地域に住んでいても、個々人で感じ方や困難の質が異なります。実際には、参加者が固定化しているなど、なかなか難しい状況もある中でご苦労されているかと思えますが、様々な状況が複雑に絡み合っ一人ひとりの生活が形成されていますし、単身者も増えている等の現実もあって、「いざという時にどう備えるべきか」ということも、実際には、その人達に聞かないとわからない部分も多い。ですので、そうした方達にも参加していただけるようなつくりを日頃の訓練に少しずつ取り入れていくなどもいくことが求められていると思えます。</p>

日野	中村さんいかがでしょうか。
中村	<p>地震災害が発生した時には個人や地域、行政に出来ることには限界がありますよね。これが通常の生活では、高齢者世帯でも子育て世帯でも、いつもは誰に頼ることなく生活が出来る、当たり前 の生活が出来る。しかし、災害が起きた時に周囲がどのように変わってしまうのか。個人だけで対 応できないという事をよく理解していただくことが大切だと思います。</p> <p>そんな時にどのようにしたら良いのかというと、広島での土砂災害でもそうでしたが、災害が発 生したときに、地域の中で回覧板を回して話し合いをする、その中で、例えば「トイレ問題をどう する」とか「子どもはどうなる？」といったテーマが生まれたなら、それについて小さなグループ で話し合いをしてみる。そうした事が大切になると思います。</p> <p>こうした話し合える組織作りに向けての一番最初の取り掛かりはやはり「声かけ」ですよ。日 頃からのあいさつに始まり、イベントへの参加があり、そして小さなグループが出来る、それが災 害対応力の向上につながっていきます。</p> <p>また、こうした事を考える時にどうしても必要だと思うのは、「地域のリーダーの方々が自ら勉強 する」といことだと思います。リーダーが人を引っ張るにはある程度の勉強が必要になるというこ とです。</p>
日野	<p>秦さん、今のパネリストの方々のお話もそうですが、阪神・淡路大震災からの復興の過程で、「防 災ばかりやってもコミュニティの活性化につながらないのではないか」といった話があって、 神戸では「防災福祉コミュニティ」という形で、福祉と防災を絡めた取組を行なったと聞いていま す。そこで、こうした視点での取組について、パネリストの方々の意見への感想でも構いませんの でご意見をいただけますでしょうか。</p>
秦	<p>ここで、会場にお集まりの皆さんにお聞きしますが、ご家庭にお水をストックされている方はい らっしゃいますか？（相当数の手が挙がる）優秀ですね、では簡易トイレのご用意はございますか？ （同じく相当数の手が挙がる）</p> <p>さて、恐らくここにお越しの方々は防災への興味も高く、また地域のリーダーの方も多いのかな と思います。また、本日のパネリストの方々についても、同様に積極的に関わっている方々です。</p> <p>では、地域の個人個人が果たしてどれくらい取組んでいるのか、という事が大切です。いくら、 「つながり」といっても、一人一人の単位で取組んでいかないと、有効とはなりません。「うちの町 内会は会長さんに任せておけば良さ」と、地域の人達が一人のリーダーに任せきりになってしま うと、とんでもない事になるのです。</p> <p>頼れるリーダーだって被災して、万が一、家が潰れることもある。普段なんでもしてくれるから と、リーダーに頼りっきりで駄目です。一人一人が意識していないと駄目なんだですね。</p> <p>あの時だって、私達のところでは誰がリーダーだったのか。炊き出しの場では私と友人がリーダ ーでしたよ。日頃何もしていませんでした。だけど「しなきゃ！」という意識が生まれたときに初 めてリーダーが生まれて、誰かが動くことによって手伝いをする人が生まれて、つながりがどんど ん広がっていきました。</p> <p>先ほどもお話がありましたが、日頃の町内会での行事の場には、見に行くだけでも良いから是非 とも参加して、ささやかな動きをする事が大切だと思います。自分がまず動くという事が大切です。 頭でいくら考えても、知識があっても、いざ自分の家が潰れて、周りが潰れて、人が亡くなりとい った環境に置かれた時に、何をしたいか頭が働きません。私にしてもしばらくボーっとしていま した。</p> <p>だから日頃から体を動かして覚えておくことが大事です。例えば逃げる場所にしても実際に一度 は逃げてみる事です。例えば、ありもので調理するといった事をやってみる事です。</p> <p>あの時、私達は火を起こしましたが、火を起こせる人がどれだけ居たか。ほとんど居ませんでしたし</p>

	<p>た。頭ではわかっているけど、実際に出来ない人が多かった。私達はよくキャンプに行っていたのでそういう事が出来たのですが、なかなか実質的に動ける人が少なかったのです。会社は潰れ、家が潰れ、身内の方が亡くなり、そういう所に置かれた時に、一体何が出来るのか。何も出来ない人が多かった。だから、出来る人が支えてあげないといけない。</p> <p>私達の所でも全てを亡くされた男の方が、心身症になられ、ボーっとしていました。私達からご飯を勧めないと食べられない、そんな状況でしたが、つまり自分が（出来る人と出来ない人の）どちらの側に転ぶかわからない、という事を常に考えてながら、つながって欲しいと思います。とにかく地域の方々には実践をして欲しいと思います。</p>
日野	<p>非常に示唆に富むお話でした。災害時にはリーダーが大事だという事はよく言われることだけれど、一方でリーダーだけに頼る状況は脆弱である、一人一人の意識を高めないと、阪神・淡路大震災や今後発生が予想される川崎市直下地震のような状況においては支えきれないというお話でした。そこで、パネリストの方々も、リーダーとはどうあるべきか、地域の人々はどうあるべきか、色々と考えているところかと思しますので、それぞれの立場から、こうした事への思いについてお話いただければと思います。</p>
若林	<p>私は地域における平常時のリーダーとしては、町内会長や避難所運営会議の委員長として災害時に備える準備はしていますが、例えば秦さんがお話された状況を考えると、実際に災害が起きたときに、自分が果たしてどこまで動けるのか、という事については課題があるかなと思います。</p> <p>リーダーの素質というのは、子どもの頃から見る事が出来ますね。橋中学校では防災教育に関しては2年くらい前から力を入れており、8月末には3日間かけて、中学1年生300人全員に対し、避難所運営会議による炊き出し訓練やプロパンガス協会によるガスの使い方の講習、消防署による担架の使い方やAEDの使い方等を行なっていて、この取組はこれからもずっと続けていくと思いますが、例えばそこで子ども達の関わり方をみるだけでも、引っ張っていく子どもも居れば、付いていく子どもも居る。</p> <p>こうした子ども達の活動を常に見ていけば、必然的にそうした事もわかってくるのではと思う反面、日頃からの地域でのリーダーの発掘となると難しい面もあります。</p>
日野	<p>脇本さんはいかがですか？</p>
脇本	<p>大学生や中学生、女性もそうですが、日頃の備えについて感じていることを、例えば高齢者の人達のように異なる属性の方と一緒に考えてみる事が大事かなと思います。例えば、必要だと思うものを選んで避難用のリュックに詰めて背負ってみたり、自宅の廊下に寝てみることで、体育館に雑魚寝するとはどういうことなのか、といった具体的な体験をしてみると、マニュアル等に書かれていることが、実際はどういうことかを身に染みて分かるので、少し想定が広がるかと思えます。</p> <p>日頃の備えを点検する意味で、また「備えていなかったらマズいんだ」という事を理解する意味で、実際に体を動かして、楽しんで防災に取り組めるような企画を、異なる立場の人達と一緒に作ることがリーダーを増やしていくキッカケになるのかなと思っています。</p> <p>例えば、今年は女性が担当して、女性の視点からの取組を行なう。次の年は中学生が中心となって、避難所の運営を小学生の子達と一緒にやってみて、気づいたことを自分達が主体となって発表していく、気づきを皆で振り返る。そうした事を継続していけば、担い手も増えるのかなと思います。</p>
日野	<p>中村さんはいかがでしょう。</p>
中村	<p>同じようになってしまいますが、今年は川崎市自主防災組織のリーダー研修でHUG（避難所運営ゲーム）について講義させていただきましたが、女性と子ども達の防災への参画は、地域防災力の向上には効果的だと思います。</p>

	<p>男性と女性は半分ずつ居ます。現実的に、東日本大震災において、女性が避難所で積極的に関わった所はほとんど上手く行った所が多かった。男性より女性のほうがきめ細かく、特に子どもや高齢者の問題などへの適切な対応によって、避難所運営が上手く行っています。</p> <p>やはり先ほどリーダーの育成というお話をいたしました。それだけではなく、「女性や子どもの防災への参画」といった部分を進めて行くという事が欠かせないと思います。</p>
--	---

【コーディネーターから質問】	
日野	<p>少し意地悪な質問かと思いますが、ご来場の方々には様々な理由から、防災活動が活発に取り組む事が出来ない事情もあるかと思っています。ただし、先ほど秦さんからは、「あれもこれもじゃなくて良い、つながりを持ちましょう、顔見知りを作りましょう」といった、今からでも出来そうなご意見もありましたが、一方で「リーダーも必要だ」といったご意見なども伺いました。</p> <p>そこで、パネリストの皆様からご来場の方々へ「今から出来そうな取組み、無理しないで出来る取組」などがあれば、一言ずついただきたいと思います。</p>
若林	<p>避難所運営の立場からお話しますと、高津区でも避難所運営会議が立ち上がっていない地域があります。しかし、防災に関しては待っていてもなかなか進んでいかない。今までは行政任せで良かったかも知れないが、区の危機管理担当は3人しか居らず、区内22箇所の避難所運営を行なっていくのは並大抵の事ではないので、各学校・避難所の地域住民が力を合わせて行政を引っ張っていきながら避難所運営を考えていくような積極性が大切になるのだらうと思います。</p> <p>それから、避難所にある備蓄物資の用意はありますが、無いに等しいと思って取組んだ方が良いと思っています。例えば、仮に川崎市が想定している直下型地震が起きれば、1箇所の学校あたり約3000人弱の被災者がやって来ることとなります。加えて、私達の地域の学校には児童生徒が平均して約1000人居て、授業中に地震が起きないとも限らず、そうした場合には想像出来ないほどの困難が生じ、これをどう乗り切るかを考えなければならない。</p> <p>そうした事を考えて、地域で自ら備蓄する、公助には期待しない、という考え方を徹底して取組んで行こうと思っています。</p>
日野	<p>脇本さんはいかがでしょう。</p>
脇本	<p>これをすれば！という解決策を挙げることは難しいのですが、例えば、私達であれば、災害時の備えに関する防災冊子を作っていますので、それを町内会の回覧やイベントの機会などを通じてコピーして使っていただいたりして、まずは避難所の場所など、地域の方一人一人に知ってほしいことをチラシ1枚でも良いので伝えていただければと思います。</p> <p>本日伺ったお話にしても、「阪神・淡路大震災ではこんな事実がある」といった事を伝えながら、一緒に皆で備えて行こうという具体的なメッセージとして出していくという事から始めてみる。また、地域の方の中には「関心がない」のではなく、「どこから関わって良いかわからない」という風に迷ってらっしゃる方もいらっしゃると思いますので、そうした方へお伝えする形で、町内の掲示板や回覧板なども活用されると良いのかなと思います。</p>
日野	<p>中村さんはいかがでしょう。</p>
中村	<p>少し観点は違うと思いますが、今、備蓄品という話が出ました。私が地域の色々な場面でお話する事なのですが、「備蓄品」と「非常持出品」は区別して考えて欲しい、というお話をさせていただきます。</p> <p>例えば実際に災害が起きた時を想定すればわかると思いますが、火事が起きたら消火器が必要ですよ。また、家具の下敷きから誰かを救助するのはジャッキ等の救助器具が必要だし、怪我した時には三角巾等の救急用品が必要になります。</p> <p>つまり、これら「消火・救急・救助」に当たって必要な物が、非常時に持ち出しやすい所にある</p>

	<p>べき「非常持出品」という物だということです。これが備蓄品になりますと、後で取りに帰ってでも持ち出せる物、生活に使う物です。</p> <p>つまり、隣近所を助け合うものとして、非常持出品を用意しておき、各家庭での備蓄品とは分けて考えた方が良いのではないかと、という事をお伝えさせていただきます。</p>
日野	<p>今のご発言のように、「どういうシーンで使うのか」といった具体的なイメージをして用意しておけば、実践的でもあり、無駄も無いのかなという事かと思いますが、秦さんは今までのパネリストの方々のご意見を聞いてどう感じましたか？</p>
秦	<p>今日、お水の備蓄にしても携帯トイレの備蓄にしても沢山の方が「用意がある」という手を挙げられました。つまり、ここにいらっしゃる方は防災について関心の高い方だと思います。また、地域のリーダーの方も沢山いらっしゃると思います。</p> <p>逆に言えば、今日の事は、本当はここに来られていない方に聞いていただくべき事ではないかとも思います。ですので、今日これから出来ることは、それぞれが帰ってから、今日の事を参加されていなかった方に伝えるという事ではないでしょうか。ねずみ講ではないですけど、1人が3人か4人の人に伝えていただく事が必要かなと思います。またサークルなどを通じて、得た知識を少しでも披露していただければ、より広がるのではないかと思います。</p> <p>口コミというのはとても大切なことで、(川崎市の防災啓発冊子を手に取り)川崎市ではこうした冊子が出ていますよね、私、いただいて拝見しましたが、これにはすごく良い事が沢山書いてありますので、これを皆さんがちゃんと読んで、頭に入れて、それぞれの地域で何かやってみる、という事につながれば、今日のシンポジウムはすごく素敵なイベントになると思います。</p>
日野	<p>今、秦さんがお持ちなのは、川崎市が出している「備える。かわさき」という冊子でして、皆さんも手にしている方は多いかと思いますが、私も長いこと防災を研究していますが、これは非常に良く出来ていると思います。これをよく読んで、突っ込んだ研修を受ければ非常に良い研修ともなりますので、是非、永久保存版として活用していただきたいと思います。</p>

【コーディネーターからの総括】

日野	<p>さて、質疑に入る前に私のほうから少し申し上げたいと思います。最初にご紹介した映像の中に、阪神・淡路大震災でリーダーシップを発揮し、初期消火に当たられた若い男性の映像がありましたが、この方は、自主防災組織のリーダーの方ではなく、一般の会社員の方でした。先ほど若林さんのお話にもありましたが、この方にはリーダーの資質があって、自然発生的に活動された訳です。</p> <p>一方で、阪神・淡路大震災で、こうした活動が地域のどこでも起きたかといえば、調査によると多くはありませんでした。地域の自主防災組織の方々の共通認識として、災害時のこうした自主的な活動が当たり前の事として根付かせることが出来れば、大災害が発生した時の状況は、当時とは少し違うかも知れません。そのために「地域は日頃からどうあるべきか」についてご議論いただいた訳でして、そのための一番のベースの部分に「つながり」という言葉があるのではないかとということです。</p> <p>また、「自分自身＝自助をどうするか」というお話が、同じく若林さんの言葉にありました。昔は「何かあれば行政が何とかしてくれる」という風に思う人も多かった。しかし、そんな事はあり得ないと考えたほうが、自分や家族の命を守るのには大事な事だということです。</p> <p>また、共助の話についても、阪神・淡路大震災のお話の中で出ました。地域のつながりは確かに大切だということです。しかし地域のつながりをもっと強くし、地域の力を高めるためには、自助を向上させる、自助が前提に来なければならないと思います。</p> <p>そこで、先ほどから一人一人が災害にどう備えるかという話がありましたが、ひとつ申し上げておきたい事があります。阪神・淡路大震災でもっとも被害が大きかった地域は東灘区で、住民の方</p>
----	--

	<p>が避難した割合、つまり避難率は36%でした。川崎市の場合、被害想定では、平均で約20%前後とかなり高い割合の方が避難することになります。ここでよく考えてください。では残りの80%はどうするのでしょうか。</p> <p>30年程前に、東京都が行った都民へのアンケート調査では、地震が起きた時に都民の取る行動として「避難する」と答えた方が非常に多かったです。そこで災害時に「地域は誰が守るのか」ということで大問題になりました。</p> <p>つまり、避難所に行かなければならないという人が居るのは当然だけれども、皆が「避難所に行く」とう頭でいたら駄目だということです。大事なことは、大災害が起きて、自分達が家に残った時に、備蓄や心構えなどについて、果たして十分な備えがあるかという事が地域に問われているのではないかと思います。逆に言えば、こうした備えがある地域は、災害に強い地域という事になると思います。</p>
--	---

【会場との質疑応答】	
日野	<p>そろそろ終わりの時間が近づいて参りましたので、これからは会場からの質問にパネリストの方方で答えていただこうと思っておりますが、何かございますか？</p>
問1	<p>今、地域の事がお話の中心となっていました。災害は自分のところに居る時に起きるとは限りませんが、外出時はどうしたらよいのでしょうか。商業施設や動物園で被災した時に我々はどうしたら良いのでしょうか。</p>
中村	<p>例えば、この前の東日本大震災の時のディズニーランドでの事例をご紹介します。ディズニーランドではBCP（業務継続計画）が策定されていたので、施設内から係員がそれぞれ来園者を広場に集めて、その周りに従業員を配置させて、安全のために移動をさせませんでした。それから来園者にレストランで食事を摂ってもらいました。</p> <p>また、帰宅困難者対策として、来園者を帰宅させずに、施設の安全点検を行ない、安全の確認した後で、来園者を施設に戻しました。それから、翌日の朝食を摂ってもらってから、午後の状況を見て、来園者を帰宅させ、その際には次回来園時の無料入場券を与えました。</p> <p>企業によってはそこまで計画に落とし込んで実施しているところもあります。このように、大規模な商業施設で被災した際には、施設管理者側が施設内点検を行い、利用者の安全確保を行ないます。</p>
秦	<p>例えば、自分に命がある場合は、落ち着いて施設の方の誘導を待つべきですね。一方、もし周りがメチャメチャな状況であれば、あらかじめ家族で災害時に集まる場所をひとつ決めておく事ですね。そうでないと、避難所が近所にいくつかあるでしょうかから、家族が会えない状態になってしまいます。</p> <p>阪神・淡路大震災ではそうした問題が一杯ありました。生きてるか死んでいるかさえ確認出来なかった訳です。私達の家族は、発生が朝5時46分だったこともあって、家族が皆一緒に居たから良かったのですが、例えば今ここで地震が起きたら、家族それぞれ別の場所で被災することになります。なので、日常から特定の避難場所に集まるという風に決めておいて、そこが駄目ならココといったものを決めておいてはいかがでしょうか。</p>
問2	<p>貴重なお話を有難うございます。秦さんと日野先生のお話を聞いて疑問に思ったのですが、私達の地域では、地域を守りながら避難所をどう運営するかについて、機能分離しようという計画を立てています。</p> <p>そんな中で、秦さんのお話には、避難所でないと救援物資が来ない、というお話がありました。その場合、避難所に行かなかった残りの70%の方への支援はどうなっているのでしょうか？</p>
日野	<p>私の考えを申し上げますと、避難所の状況は、プライバシーの面で、かなり辛いものであるとい</p>

	<p>う事はお伝えしたいと思います。自らの尊厳を保とうと思えば、避難所に行くよりも、自宅に留まることを想定して備えたほうが良いと思っています。</p>
秦	<p>阪神・淡路大震災では、避難する必要の無い、例えば家が半壊したような方達が一番気の毒でした。家庭での備えが1ヶ月分ある訳でないのに、あれほどの被害の状況で、復旧もなかなかしない中、お店で食糧を調達する事など全く出来ませんでした。</p> <p>避難所に居れば国や他県から来る救援物資を得られたものを、家に居るばかりに物資を自分で調達しないといけない、ところが店が潰れて物が入らない、大阪まで買出しに行きたくても交通が遮断されて行けない、仕方なしに避難所に行って物資を得ようとすれば、「あなたは家が壊れていないのに、何故避難所に来るのか」といった雰囲気もあった訳です。</p> <p>ですので、なるべく避難所に頼らないで生活する事は大切だけれど、一方で避難所に来る物を、避難所に来ないで自宅で避難している人にも分けるような方策を今のうちから考えておくべきだと思います。</p>
日野	<p>私と秦さんの話が矛盾しているかと思うかもしれませんが、自分の家を避難所にしようという発想を持たないと、自らの家を安全な空間にしようという意識が高まりません。</p> <p>また、こうした考えは、実は避難所の負荷を減らすことが出来ます。いくら備えをしていても結局は避難所に行く必要が生じる事態となるかも知れませんが、こうした意識は、避難所の持つ重要な機能である「本当に必要な人に必要な支援を与えられること」につながります。この辺りは少しバランスを取りながらになると思います。</p> <p>大切なことは、避難所に行くことにばかり意識を取られず、自宅の備えが十分行なう事だということです。</p>

【パネルディスカッション終了】

日野	<p>まだまだ話すべき議題があるかとも思いますが、この辺で終了させていただきたいと思います。</p> <p>パネリストの皆さん、今日は貴重なご意見、有難うございました。ご来場の皆様も、本日の内容を地域でご活用いただければと思います。本日は有難うございました。</p>
----	---